

戦争被害の子どもたちを救おう

チェチェンでの小児医療への取り組み

チェチェン人外科医ハッサン・バイエフ11・12講演会

岡田：私はこの会の主催者の一人である「チェチェンの子どもたち日本委員会準備会」の共同代表をしております岡田一男といます。私と後ろに座っているチェチェン報道の草分けである林克明が共同で代表をしております。もともとこの会はここに座ってらっしゃるハッサン・バイエフさんと呼ぶことをきっかけに始まった会であります。ハッサン・バイエフさんが来日されるのは今回で三度目です。初めはちょうど2年前2006年の秋に来られまして日本各地を回られました。それから今年の2月から3月にかけて、埼玉医科大学の総合病院である埼玉総合医療センターというところの形成外科で、2カ月間研修を受けられました。その間にレーザー治療に関するトレーニングを1カ月ほど受けられました。

ご承知の通りバイエフさんは、アメリカに亡命されていたわけですが、アメリカは医師免許に対しては非常に厳しいところです。日本もそうなんですが、医師としての活動は亡命以来中断していたのですが、どうしても外科医に復帰しようというので、そのためにいろいろな準備をしているわけです。日本でも先進的な医療技術を学ばれましたが、アメリカでもハーバード大学の医学部の小児科病院で訓練を受け、「オペレーション・スマイル」という国際的な医療支援団体に参加しました。そこから派遣されて、ロシア、ベトナム、コロンビア、そして今回はチェチェンで本格的な医療活動を始められ、外科医に復帰するということが実現したわけです。

そういうことで今は外科医としての活動をかなり活発に始められました。今年の6月末から10月末まで約4カ月間チェチェンに戻りまして、そこで医療活動を行いました。今お見せしようとしているのは、7月に中東のアルジャジーラと英国のBBCが中心になりバイエフさんの活動を現在のチェチェンの状況も含め取材しまして、20分ほどにまとめた番組です。それをご覧いただければ、今のチェチェンの現状がある程度おわかりかと思えます。一方で非常に再建が進んで、ほとんど以前のグローズヌイを象徴的に表していたような凄惨な廃墟というのは、ほとんど一掃されてしまいました。すべての建物が新しくなってきた綺麗な街並みを実現したという点では、確かにこれは驚異的なスピードで再建が進んでいると言えます。ただ、そこでいったい人間はどうかということ、非常に厳しい現実があります。その中で多くの人が将来の問題に対して闘っているという現状だと思えます。

小児医療の改善というのは、カディロフ政権自身が「今年中に何とか解決しなければいけない」と非常にあせった言葉を発しています。そういった点で大きな問題になっているわけですが、それがどんなに厳しい状況かということはこの映像をご覧になればわかると思います。

チェチェン戦争が10年以上続いて、その中で10年前に両脚を亡くした女の子が出てきます。それと同時につい最近埋まっていた地雷で両脚を失ってしまった少年が出てきます。そういった形で実際に直接の戦争の傷ということもありますし、それからもうひとつは、あまりにもいろいろな理由で因果関係が特定できないのですが、先天的な障害をもって生まれてくる子どもが非常に多いのです。ひとつは口唇口蓋裂、それからダウン症の子どもが非常に多いことも報告されてます。戦前はそんなことはほとんどなかったわけですから、明らかに戦争が原因だと思えます。最初バイエフさん話していただいて、その後にビデオを上映したいと思えます。

バイエフ：今晚は皆様。3回目ともなると、かなり顔見知りになった皆様もこの中にはいらっしゃるのでは、本当にここへ来て講演できるというのはありがたいことだと思っております。4月の始めに私はベトナムに向かったわけですが、ここに座るとずっと日本にいたような気分にもなるものです。

前回来日した時はこの会場で送別会をしていただいたのですが、日本を出てすぐに2週間ベトナムへ参りました。そしてベトナムにおいて、チェチェンとやはり似たようないろいろな戦争の結果であろう、障害を持った子どもたちが生まれているということをそこで目撃しました。特に戦争の被害が激しかったところで、そういった障害を持った子どもたちが生まれているということを私は目撃しました。

そこで感じたことは、ベトナム戦争というのはいづいぶん前の話なんですけど、それでも戦争の傷跡というのは、今もって続いているということに私は非常に衝撃を受けました。それを見るというのは私にとって非常につらい経験でした。ベトナムでの2週間を過ごした後、ごく短い期間であります私にはチェチェンに戻りました。なぜチェチェンに戻ったかと言いますと、自分を見出してくれた「オペレーション・スマイル」のチェチェンでのミッションの準備があったからです。

その後、アメリカに戻って間もなくコロンビアへ飛びまして、そこでおおよそ1カ月口唇口蓋裂の手術に従事しました。コロンビアでは中央軍病院という軍隊の病院で仕事をしました。コロンビアではたんに口唇口蓋裂の子どもだけではなくて、地雷に触れた兵士の治療も一緒に経験しました。そしてコロンビアの後、チェチェンに再び向かいまして、そこで約5カ月間過ごしました。私どもはかなり大がかりな「オペレーション・スマイル」のミッションをチェチェンで組みました。

それには私も含めて28人の医療スタッフが参加しました。「オペレーション・スマイル」というのはアメリカの組織ですが、今回は国際的な医療チームで、いろいろな国からの参加者が加わった混成チームが組まれていました。ロシアからの参加者もその中にはいました。そしておおよそ400人の口唇口蓋裂の子どもに対して治療活動を行いました。先天的に障害をもって生まれてきた子どもたちです。それから、やけどを負った子どもたちというのも非常にたくさん目にしました。神経的な問題を抱えている子どもたちだけで500人いました。

2週間にわたってこのミッションは続けられたわけですが、優先的に症状の重い子どもたちを中心に実際の手術というのを行いました。あまりにも問題の多い子たちが多かったので、1回のミッションですべてを解決するというにはいきませんでした。数百人の実際には手術を受けられなかった子どもたちが残りました。

こういった子どもたちは、どこか他のロシアの地域に行って手術を受けるという可能性がほとんどなかった子どもたちです。そのため「オペレーション・スマイル」では来年もこういった形のミッションを行って、少しでも残った子どもたちの手術をやろうという計画でいます。

この医療チームの参加者一同が驚いていたのは、チェチェンの復興が非常に早く進んでいるということです。本当にきれいな建物が建ち並び、公園などもきれいに整備されて、グローズヌイの市の中心部からは廃墟というのは一掃されてしまいました。

建築物の復興というのは非常な勢いで進んでいるというのも1面ですが、人間に対して与えた戦争の傷というのは簡単に癒えているものではないというのも事実です。そして医療関係者も非常に劣悪な状況で、山のような患者をかかえて奮闘しているという状況です。

機材も医薬品も足りませんし、もう少し手術の器具があれば、そしていいインフラがあればもっと能率はあがったでしょう。とにかく頑張っても、手術できたのは、当初120名という目標があったわけですが、非常に重症な子どもたちの手術だったので60人というのが限界でした。

ブラジルからはかなり高名な神経病理学者が参加していました。彼女はかなりいろいろな国に行ったことがあるけれど、これだけ一度に様々な症状の、特に神経障害を持った子どもたちに出くわしたということは初めての経験だと言ってました。

「オペレーション・スマイル」の事前診察でどの子を実際に手術しようかということで、いろいろな子どもたちと両親がやってきたところです。この時も、本当にびっくりするような数の子どもたちがやってきました。

誰もそのような障害を抱えた子どもの親であれば、このチャンスを逃すまいと思ってやってきたんです。子どもたちを本当に真剣に心配した親たちが来たのを見て、受け入れる側の医師もとてもつらい経験でした。

多くの子どもたちが先天的に手がないとか、脚がないといった状態でした。さらに神経系統の障害を持っているので、ブラジルから来た神経病理学の女医さんは、「総合的なチームを組んでこない限り、なかなか問題は解決しないよ」ということを言っていました。

そしてまた、そういった医療チームが治療をすると同時に、チェチェンにおける医療関係者にアフターケアの問題をどういうふうにするべきか、という訓練をしていかなければいけなという助言もしてくれました。

しかし、チェチェン共和国は今とても医者数が不足しています。チェチェン戦争をきっかけに多くの医師がチェチェンを離れて国外にでて多くの人間がヨーロッパ移住してしまいました。意欲的な若者で、医療に従事しようという人たちも確かに存在しますが、この人たちが経験不足であるということは否めません。いかにいい医者を確保できるかという問題は、非常に深刻な問題としてチェチェンの将来に立ちだかっています。

腫瘍とか癌とかそういったものを治療するという意味での病院は、非常に大きなものが開設されました。しかし、建物を作っても、そこで働ける医者数が全然足りていないという状況です。

ですからロシア中に向かって、「チェチェンに来て医療活動に励んだらこんなにいい待遇だぞ」というふうな呼びかけがロシア全体の医者になされています。

腫瘍を患っている人がいかに多いかということですが、ロストフナドヌーという南ロシア連邦管区の中心都市がありますけれど、ロストフナドヌーの病院の患者の80%はチェチェンから来た患者とされています。

それ以外にも本当にいろいろな病気です。脳溢血であるとか癌、心臓発作、それから血圧異常というのも非常に多く人がを患っています。血液関係の病気も非常に多いです。それから結核もまん延しています。だから大げさに言ったら、「チェチェンには健康な人間はいないのではないか」というくらいというのが私のチェチェンの印象です。私自身も自分の回りの家族にほとんど健康な人間がいません。また病気の死亡率が非常に高いのです。これはまさに戦争の結果というか傷跡だと思います。

この写真は手術室の様子です。今、麻酔ををかけているところです。本当にいろいろな国からの医療関係者スタッフがここにいます。ハーバード大学の形成外科の主任の方です。

この子は口唇蓋裂の障害が大きな子どもでした。この子はもう手術を済ませた後で、今舌を固定しているところです。

この子は先天的に右目がない状態で生まれてきました。

この子も上が2カ所にわたって切れています。この子が手術を受けた後の写真です。

これは現地のスタッフと一緒に撮った記念写真です。この子も先天的に異常をもって生まれてきた子どもです。生後1週間です。何が原因でこうなったかということは全然わかりません。なぜこんな写真を撮ったかという、これを持ち帰ってアメリカで同僚たちにこれを見せて、これを一体どうしたらいいかということとを相談したくてこういった写真を撮りました。

5カ月前に両親から相談を受けて、この子の写真を撮りました。その時にはほんのちょっと唇のあたりに異常が見えただけだった。5カ月後にこんなに異常が膨らんでしまいました。本当に対策を講じるんだったら、いろいろな専門家がきちんとした診断を試みなければいけないので、本当に1枚の写真で何か解決策が見つかるなんてことはあり得ないです。ですから細胞学的にも遺伝学的にもいろいろな側面からこの異常が何で起きたかということを検討しない限り、対策というのは難しいでしょう。

こういったものを治療するためには、1つはレーザーによる治療ということが考えられるわけです。私がレーザー医療に興味を持っているということは、こういったことが背景にあるわけなんです。そうことでレーザー治療器を購入しようということの背景になっているわけです。今年2月から3月にかけて1カ月間、信濃町にあります大城クリニックでトレーニングを受けたというのはこういった理由もあるわけなんです。

前回来日した時はレーザー治療器を購入するまで手がまわりませんでしたので、私は機材なしでチェチェンに戻ったわけです。

岡田：それでは、質問のある方に答えるという形で進めたいと思います。かなりいろいろな質問が前回も出まして、今日お配りした資料の4ページ、5ページにその答えをハッサンと話をしている私がまとめましたので、できるだけこれ以外の質問があればお答えするという形でできればと思います。

ハッサン：私はチェチェンの子どもにかかわっているわけですが、子どもの問題というのは世界共通でどこでも問題になることです。

Q：チェチェンにおける医療教育機関の再建というのはどうなっていますか？

ハッサン：チェチェンの高等教育機関というのは、形としては再建されました。ただ、その質というのがどうかと申しますと、非常に質が低いです。医者たちも多くは難民となって国外に出てしまって、そのまま戻っていないということがあります。医者が少ないだけでなく、医者を養成することについても問題が多く、それをやらなければなりません。現在のロシアで医者の養成教育というのは、すべて有料ですから、医者の養成にはかなり高い金がかかります。そういった訓練を受けるために、他のロシアの地域に若い駆け出しの医者が行くということは、非常に困難であるということもあります。

昔のソ連の時代は教育は無料だったんです。逆に奨学金がでるくらいだったんですけど、現在は有料になっています。

岡田：つい最近の事例ではイムラン君という少年が弘前大学の病院で治療を受けました。彼は頭がい骨の1部が後ろから撃たれたのか、破片でやられたのか、とにかく皮膚だけになって、皮膚に脳みそがくっついている状態になってしまっている状態でした。そこにチタンのメッシュをかけて、骨を新しく作ってという手術が成功しました。この子はバクーから2年前にきたんです。この子がすでに両親と一緒にグローズヌイに戻って、グローズヌイの国立大学に入学できることになったんです。そのこと自体は非常にめでたしめでたしなんですが、入れたのは入れたんですが、5000ドルくらいお金を積まないと教育を受けることはできないということで、親よりも子どもの方が心配しちゃってということがありました。

ですから、本当に勉強するのも金次第という世界になってしまっている。それから私はこの間、ちょうど地震があったころにハッサンのところに行ってきたんですけど、ハッサンは子どもに対して診察したり治療したりしても一切お金を取ってないんですよ。それでよくハッサンに対して、親がみんな心配そうな顔をして、「ハッサンあんたは有料？」と聞いていました。ですから普通みんなお金を出さないと医者にかかることができなくなってしまったというのが、今のロシア、チェチェンの現状です。

Q：チェチェン以外の地域で口唇口蓋裂の子どもというのはどうなっていますか？

ハッサン：私が見た例としては、ここでも多いなと思ったのはベトナムなんです。ここにいる子どもたちも明らかに戦争と関係ある形で生まれてきて、そういった症状を持っています。ベトナムでは枯れ葉剤に代表されるような化学兵器がかなり使われたということがあつたわけなんです。

書き起こしは 市民平和基金のご好意によるものです。